

じゃりみち

……仮設支援情報……

第27号 発行日 1996. 10. 3

阪神・淡路大震災

「仮設」支援NGO連絡会

〒653 神戸市長田区御蔵通5-5

TEL: 078-578-6921 / FAX: 078-578-6923

E-mail: ngoteam@mb.osaka.infwave.or.jp

口座番号: 01180-6-68556 (郵便振替)

決国会体会のお知らせ

次回全体会は、9月29日の「10ヶ月後発見」という孤独死についてを中心に、来年97年1月17日に向けて行われる『第二回 市民とNGOの「防災」国際フォーラム』に「仮設」NGOとして参加することの承認、その他情報交換を行います。誰でも参加自由です。き・て・ね♡

10月9日(水) 18:30～ 阪神・淡路コミュニティ基金事務局の隣の会議室

阪神・淡路コミュニティ基金事務局(元町)

孤独死を考える……

96年9月29日、発見10カ月後という孤独死が発生した。38歳の男性で、病死という。左隣は空き仮設、右隣は留守がちという状態の中であったという。「様子がおかしい」という声があったのだが、「留守かもしれないので開けられない」と言われたそうだ。

前々から私たちNGOは連日続く孤独死について、「行政」と「市民」と「NGO」が有機的な連携をとることによって、100%は無理にしても未然に防げるのではないだろうかという検討をしていた。しかし、なかなか具体的に見えず、日々の救援活動を行っていた中でこの孤独死は非常に残念でした。最終的にはいつも個人のプライバシーが壁になり、それ以上進まないのです。

せっかくこの震災で生き延びたのにも関わらず、いたずらに死んでいくことをただただ見過ごして良いのでしょうか？

前国会体報告

前回の全体会では、少し進行を変え、団体会員である「プロジェクト1-2」の有光みさんに司会をしていただきました。そして有光さんからの提案である「共同プロジェクト」のグループディスカッションをし、その他村井くんの雲南報告(※)、情報交換が行われました。

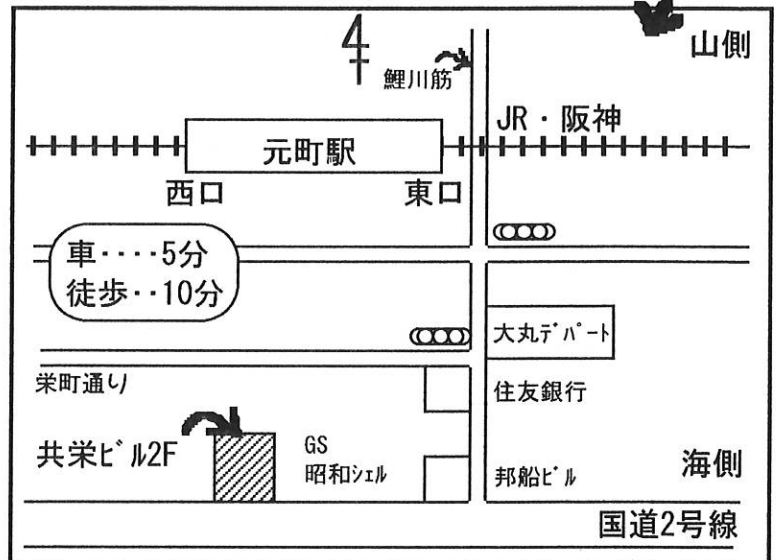
各団体のマンパワー不足、資金的問題、活動の連携などの目的からたちあげられた、「ふれあいセンターでのコミュニティづくり・子ども・訪問看護・移送サービス・心のケア被災地とのネットワーク」といったような中で、今回は「ふれあいセンター・子ども・訪問看護・移送サービス」の4つのプロジェクトに、それぞれに関わる団体ごとに別れて話し合われました。

<ふれあいセンターでのコミュニティづくり>

- ・お互いの限られた時間の中での協力をどうしていくか?…情報交換を通して緩やかに協力していこう。
- ・他の共同プロジェクトとの連携もしていきたい。

<子ども>

- ・いろいろな活動のしかたがある中でどう協力を?…おもちゃや絵本などを貸し借りすることができる事務局があれば(「仮設」NGOがとりまとめるとか)。
- ・子どもとつきあうことで心のケアも考えていきたいし、また子どもからつながる親やご老人のケアもできたら。それぞれのノウハウなどをシェアできるような場の設定が必要。



〒650神戸市中央区海岸通2-1-2 共栄ビル2F

TEL 078-333-4335 ※駐車場はありません!

- ・仮設住宅内だけでなく、地域も同時に見ていきたい。
- ・とりあえず今は顔の見える関係づくりを。
- <訪問看護>
- ・ヘルパーの養成講座の実施…行政と連携し、今年度中にたちあげたい。条件としては仮設住宅に関わっていくこと。
- ・看護ステーションの立ち上げ
- ・各団体との連携について…訪問活動に専門家の視点を提供していく。
- ・現段階として…訪問活動するための事務局の必要性。
- <移送サービス>
- ・現状…西区、東灘区、須磨区中心。主に入浴、通院介助。
- ・課題…参加者が必ずしも重度の障害などがあるわけではなく、本当にケアをしていく人たちのフォローの難しさ。男性が中心のボランティア。安全の問題。人・物・金不足。車などの維持費、人件費、通信費。
- ・方向づけ…保険での対策、行政との連携。将来的には全域をカバーできるようなコーディネート機関の設置ができれば。各団体とは緩やかな連携の中から情報の共有化を。時間をかけてやっていきたい。
- 全体的に情報交換の場、コーディネート場の必要性というものが出てきました。また、緩やかな連携の中でお互いに協力していきたいといった意見が出てきたように思います。今回の話し合いである程度各団体さんの顔が見えてきたのではないのでしょうか?
- (※村井くんの雲南地震の報告は前号のじゃりみちに載せました。)

つながりを生かして

～災害ネットワークを考える～

全国をまわって震災語り継ごうという全国キャラバン。何回もの全国キャラバンを受け入れて下さっている愛知県の団体同士が連携を取り始め、先日夜遅くこの事務所まで足を運んで下さり、その日のうちに（いや、翌日の午前3:00に！）帰って行かれました。

何をしに来られたかということ・・・「これから『災害ネットワーク』（災害が起きたときにすぐに対応できるネットワーク）を作っていきたい」ということでした。この震災から「つながりを生かして私たちのできること」を模索しに来られたのでした。今までの検証をし、そしてこれからどう考えていくのかを一緒に考えていけたらと思っています。

～お返事いただいて（心の郵便局）～

心の郵便局で仮設住宅の方よりお返事を頂いて、一度自分で神戸を見たいと思い、伺いました。

テレビで見る仮設住宅と実際にお宅にあらせてもらって見た印象は、だいぶ違っていました。雨音は響く、床は低い、段差はある。仮設住宅の方にお話を伺って、はじめはどうしてこんなところで暮らすのかと悩んだり、病気になるというのわかる気がしました。

「もうものは何も要らない」という言葉がとても印象的でした。いろいろつらいこともあるけどその中で楽しみを見つけて暮らす、強く生きなきゃという姿が魅力的でした。希望をなくさないこと、神戸の仮設住宅の方に教わりました。

早く希望の市営住宅に入れますように。

横浜 野澤 由紀さん

県外避難者の実状と支援を考えるシンポジウム

9月28日（土）、ハーバーランドの神戸市産業振興センターで「帰りたい！帰れない」と題して、県外避難者の実状と支援を考えるシンポジウム（主催：県外避難者支援全国ボラネットフォーラム実行委員会）が開催されました。参加者は、市外・県外避難者の方をはじめ、行政、ボランティア団体など、約300人（主催者側発表）。

まずは、8人の県外避難者の方から発表がなされました。高校生の子どもの持つ主婦の方からは、市営住宅が当たったけれども、子どもの教育の件で悩んでいる話や、20代の女性からは、通勤時間があまりにも長いこと、仕事を辞めざるをえなかったこと、来年には今住んでいるところ

を出なければならず、未だに住むところのメドがたっていないことなど、県外で生活しなければわからない生の声から次々と出されました。また、県外避難者支援に関わっているボランティアと話したところ、電話相談を受けていると、1995年の1月17日で気持ちが止まっている人があまりにも多いことがあげられた。裏を返せば、県外で孤立化する生活の中で、自分の悩みを押し殺してしまうため、1年以上たった今、吐き出すように震災当初からの話がでけるとのことでした。

私たち「仮設」支援NGO連絡会としては、仮設住宅入居者支援を行っている団体の集まりですが、仮設住宅に取り組む中、県外避難者をはじめとして見えてきた様々な問題に対しても、視野に入れて活動する必要性を実感した一日でした。

★週末ボランティア

日時：10/5（土） 13:00～18:00

訪問先：神戸市西区岩岡町岩岡1268 岩岡第2仮設住宅

集合：JR「大久保駅」13:00 駅の南口で集まります。

訪問時間：14:30～17:00

移動は全て自動車。車のある方はご協力下さい。

当日は030-821-8575 鹿島/030-121-9709東條まで。

お問い合わせ:TEL/FAX078-795-6499 (080-121-9709 東條まで)

10/6（日）第5回総会 14:00～17:00

これからの週ボラ活動の行方についての大事な総会になります。

議題(1)今後の訪問計画について (2)週ボラ活動の批判について

(3)NOVについて (4)その他

他に持参議題のある方は事前に瀬戸議長の方へお申し出下さい。

場所：北須磨ボランティア事務所（TEL 078-795-2855）

情報コーナー

◆大阪YWCA こころのケア・プロジェクト

市民ボランティア実践講座（公開講座）

こころのケアの「今」そして「これから」

～ボランティアの立場でできることは～

11/1（金） 13:00～16:00 大阪YWCAにて

講師：小西聖子

対象：ボランティア活動を希望している方

現在ボランティア活動を行っている方

費用：1,000円（資料代）

申込先：大阪YWCAこころのケア・プロジェクト

TEL:06-361-0838/FAX:06-361-2997

*定員は100名です。申込は電話またはFAXで

事務局より

だんだんじゃりみちも情報量が多くなってきました。「これからはぼちぼち枚数を増やしていかなあかんのやろか？」と考えています。このことに対してのご意見・ご感想頂けると非常に参考になります。また、FAX送信しているところも、郵送に切り替えていこうと踏ん張っていますが、実は2人で編集・発送の手続きをしまして、ひっじょーに山となったお仕事を抱えながらの作業、なにとぞ失礼、手違いあるかもしれません。お許し下さいませ。

またまた、それに伴い、そしてつながりを広げるためにも、全国での震災関連のイベントを募集しています。ございましたら事務局までお知らせ下さい。

< 仮設は今... >

須磨区編

高倉台仮設住宅は第1、第2、第3仮設合わせて約160戸。第5次の募集仮設ゆえに、親子でお住まいの方や昼間仕事で留守というお宅が多い仮設住宅です（高齢者などは優先的に最初の募集で入居しているため）。ここは“穴”という感じだったのか、今年の6月にプロジェクト1-2が関わるまで殆どボランティアの出入りがありませんでした。そのために情報も入らず、孤立した仮設住宅でした。第1仮設住宅に関しては、それが幸を奏したのか、自治会がとてもしっかりしており、月1回自治会が中心になってふれあいセンターで炊き出しをし、住民の方々と暖かい時間を過ごしておられます。

一方、第2、第3仮設は対象的で、ふれあいセンターがないため、住民同志の交流やふれあいもなく、両隣の人の顔が何と分かる...というおつきあい程度です。そのために、高齢者の方にとっては不安な一面を持っており、私たちの訪問に喜んでおられました。（第3仮設は今年の9月頃空き仮設を利用したふれあいセンターができたが、殆ど使用されていません。）

この第1、第2、第3仮設住宅とそれぞれの事情の異なる仮設住宅の方々と、私たちはどのような関係を作っているのでしょうか...。初心に戻って、今素直に向き合うことからスタートしているところです。

（プロジェクト1-2 代表 有光るみ）

震災後、何かできることをしたいと思いつつ、義援金集めしかできぬまま日々の仕事に追われて月日がたってしまっていたそんなとき、主人の転勤で西宮に引っ越し、プロジェクト1-2に参加した。

まずはこの1年半の状況を聞かせてもらうことから始まった。聞けば聞くほど、本当に何も知らなかった自分...同じ国のこんなに近くでこんなことが起こっていたのに、何も行動していなかった自分が見えてきた。今は高倉台仮設住宅・西神第7仮設住宅・御旅地域型仮設住宅へと訪問させてもらい、一歩ずつでも皆さんとふれあい、西宮にいるわずかな期間だけでも（11月から東京へ戻り帰職予定）、そんな情けない自分自身のために何かしたいと思っている。

高倉台仮設住宅（第1）では、ふれあいセンターを中心にコミュニティーができてきている。しかし、第5次募集のために日中勤めて不在の人も多く、すべての人が参加しているわけではないし、コミュニティーに入らず、いろいろな行事にも参加しない人たちもおられる。自立して生活できる人たちの中に、自ら社会的なつながりを作れなくなってきている人もいる。老人ホームで働いていた折り、お年寄りがずっと社会性を保っていくことの難しさをしばしば感じていたこともあったか、そこからもれていく人たちのことが気に

なる。またお年寄りと一緒に過ごしてきて、支援の仕方なりを自分なりに学んできたが、中年度層の働き盛りの人たちになると、私自身、どのように関わっていったらいいのかわからなくなる。

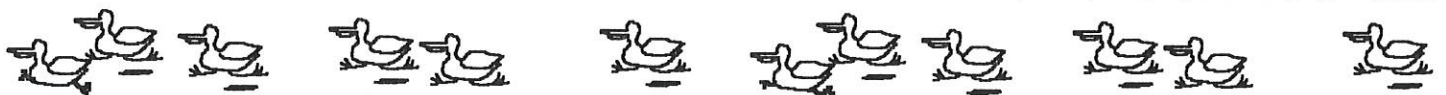
みんなが住宅のことや家の再建のこと、ローンのことと様々な問題を抱えている中、私はボランティアとして戸惑いながら自分の姿を模索している。災害を乗り越えようと頑張る神戸の人たちの強さとふんばりを、ボランティアの草の根的な行動力を感じる。

私は今までとは違う心の揺れを感じている。もっともっと自分の時間をうまく使ってふれあうチャンスを持ち、自分なりに感じ取っていききたいという気持ちが募る中、もうすぐ神戸を去る。なんだか中途半端な思いが残る今日この頃である。今を大切にすればよいとアドバイスを受ける。その通りだと思う。いろんな人たちに出会えたこと、そして学んだこと、感じたことをそのまま持ち帰って、少しずつ消化していこうと思う。少しの間でも神戸にいられたこと、ボランティアの視点で見れたことを大切に、これからの仕事に役立てていきたい。そして神戸を見つめていきたいと思っている。

プロジェクト1-2 小林 麻里

ーボランティアは
楽しくなきゃね！ー

だ、代表...



てれふぁんかーど、く・だ・さ・い♡

10月現在161枚!! ありがとうございます。引き続きお願いいたします。

がしキは走る

(全国キャラバン日程表)



10/5~6	神奈川県 藤沢市	湘南学園学園祭	がしキ・パ・祢	(有光)
10/9	東京都 日野市	七公会堂 (コンサート)	がしキ・パ・祢・販売	
	鳥取県 鳥取市		講演会	(石井)
10/11~13	茨城県 つくば市	筑波大学学園祭	がしキ・パ・祢	
10/23	愛知県 豊橋市	豊橋中学校	講演会	(石井)
10/26~27	神奈川県	神奈川大学学園祭	パ・祢	
11/1~4	京都府	佛教大学学園祭	パ・祢・販売	
11/2	静岡県	日本大学三島キャンパス	がしキ・パ・祢	
11/2~3	東京都	青山学院大学学園祭	情報交換会	(石井)
11/3	東京都	淑徳短期大学学園祭	がしキ・パ・祢	

会場、時間など詳しいことに関しては「プロジェクト結ぶ」の石井 布紀子さんまで。

プロジェクト結ぶ：0798-64-5829 (FAX 0798-65-5254)

ふきちゃんのキャラバン日記 その2 ~96年夏の記憶から~

名古屋 グラスデイズ の巻

「東海大震災 あなたは生き残れるか？」

9月1日は防災の日。全国あちこちで「防災」をテーマにしたイベントが催されたそうです。全国キャラバンでは、愛知県東郷町で行われた『グラスデイズ』という企画に出演。「仮設」NGOに加盟するボランティアメンバー10数名も参加しました。

今回は、2日間盛り沢山の企画（がしキ展・写真展、フリーマーケット、コンサート、講演会、シンポジウム、深夜交流会、ワークショップなど）の中から、8月31日のシンポジウムを思い出しながら書きはじめています。

この日のシンポは3部構成、3時間半が予定されていました。タイトルは「東海大震災 あなたは生き残れるか？」。まず、1部3名（静岡県防災情報研究所・西井さん、東郷町役場総務課長・近藤さんと私）、2部3名（普賢岳噴火災害対策特別委員・高木さん、東郷／三好／日進／長久手子育て支援ネットワーク・後藤さん、「仮設」NGO・村井さん）のパネラーが基調トークを行います（コーディネーターは1部2部ともにアジア保健研修所の池住さん）。さらに、休憩をはさんで3部に進み、6名のうちの女性2名（後藤さんと私）がコーディネーターに、他4名がパネラーとなつてのフリートークで、最後には会場を交えてのディスカッションという流れでした。

大半の参加者の方はわくわくしていたことでしょう。

「行政、半官半民、ボランティアという異なる立場で防災を語るはずのパネラー6名。しかも、愛知県地元民、東海大地震防災機関職員、阪神・淡路大震災被災地市民、島原被災地市民という異なった土地からの話が聞ける」と。ただ、あまりに盛り沢山の話題を選ぶと全体として有意義な話し合いを持つことは難しくなるはずです。そこで、事前に何度も何度も打ち合わせをしたという実行委員の人たちから、次のような申し出がありました。シンポがはじまる直前、全員が顔を合わせての打ち合わせの席でのことです。「今日は“救援物資”をキーワードとし、全員の共通の話題として頂けませんか？たとえば、石井さんたちには、救援物資が被災地を襲う第2の災害とまで言われる理由を実感するような具体例をお願いしたい。また、近藤さんには、東郷町での救援物資にまつわるシステムの話希

望します。全員が、それぞれの立場について、“救援物資”の取り扱いという具体的な事柄で話をするようになれば、きっと、立場や地域差を超える普遍的に重要なポイントが浮かび上がるような気がするのです。」というような内容だったと思います。あつという間に本番がはじまり、防災情報研究所・西井さんが話をはじめました。さすがにその道のプロという感じ。地震の規模のとりえ方から、直後3日間の混乱を想定してのシステム構想について、などなどを約15分間でお話になりましたが、非常にわかりやすい内容だったように思います。私は、1部の最後に話をさせていただいたのですが、先に話されたお二人のお話を聞いて、問いが浮かんでいました。「防災システムとして検討すべき時期は、地震直後の3日間などの、生命の無事を確認してひととおりの食べ物がいきわたるまでの短期なのだろうか？被災者が、被災被害を乗り越えるのには、長い時間がかかるはず。それら長期の取り組みをふまえての防災システムを検討してみたいという考えは、ヘンなのだろうか？」。

さて、当事者でありながら、恥ずかしげもなく言わせて頂きますが、ありがたいことに、この日のシンポは大好評。遠隔地からの物資後方支援をするにあたっての「島原方式」の話や、村井さんのハビタット（世界居住の権利会議：於イスタンブール）の話、そして全員でのディスカッションなどなど、実行委員の方の狙いが当たったように思います。それぞれのパネラーにとっても、日頃聞けない立場からの発言を聞くことができ、有意義な場所だったはず。私も、「今後、全国あちこちへ出掛けさせて頂くときに、参考になるような話がたくさんあった」と、大喜びです。残念ながら、紙面の関係で今回の報告では詳しい内容は省略させていただきますが、もし「ここまで書いておいてそれはないよ。詳しい内容を是非知りたい」という声が返ってくるようであれば、また後日、改めてお知らせする機会を持ちたいと考えています。

なお、最後になりましたが、今回の『グラスデイズ』シンポジウム実行委員会についてご紹介させて下さい。実は私がキャラバンで愛知県入りするのは、今回で7回目だったのですが、6回にわたって愛知入りする中で、いくつかの団体に所属する方と出会うことができました。AHI（アジア保健研修所）、同朋大学、震災から学ぶボランティアネットの会などなど。これらの出会いは、私にとっても有意義でしたが、愛知県の方にとっても貴重だったとが。

……仮設支援情報……

“阪神・淡路大震災 被災地支援”というできごとを共有する仲間の輪が広がっていく結果となったからです。そして、それらの方々が力をあわせて作り上げたのが今回の企画。ガレキ展や写真展を含めて、被災地からできるだけ多くのメンバーを招こうと努力を重ねて下さいました。「これから、立場を超えて自然災害と向きあ

ていきましょう」という気持ちの確認をさせて頂いたように感じています。

被災地情報がどんどん少なくなっていく県外の地で、苦勞しながらもあきらめてしまうことなく、被災地支援の仲間の輪を広げようとされている人々の取り組みを知り、私は少し元気と勇気を頂きました。

(プロジェクト結ぶ 石井布紀子)

次回からは、シリーズ「3度目の1月17日をどんな風に迎えようかな？」をお届け致します。

村井くんの

ハビちゃん講座



人間みんな同じや!!

阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会代表 村井雅清

96年6月3日～6月14日までトルコのイスタンブールで開催された「ハビタット2」(国連人間居住会議)に、私は「被災地NGO」の一人として参加する機会を得ました。今回のテーマは、「すべての人々に適切な住まいを」、「都市化する世界における持続可能な人間居住開発」の2つでした。

「すべての人々に適切な住まい」とは？

今回「ハビタット2」で取り扱われた「居住の権利」。いったい「居住(住まい)」とはどういう意味なのでしょう？

一般的に言われる「住まい」というのは、「雨・つゆがしのげる家」というようにとらえられていると思います。しかし、私は震災で見えてきたこととして、「雨・つゆがしのげる」だけでは「住まい」とは言えないのではないかと感じ始めました。いくらきれいな立派な「住まい」があっても、その人自身が幸せと感じられなければ、何の意味も持たず、また1つ目のテーマである「適切な住まい」とは言えないのではないのでしょうか？

今回のハビタットで扱われた「居住の権利」は、誰もが人間らしく生きるための「基本的人権」として「世界人権規約」でも認められています。ですから、言ってしまうとこの震災で「住まい」を失った被災者は無条件に「居住の権利」を主張してもおかしくはありません。しかし、現在被災地で元の「住まい」を失い、震災後から公園や避難所での生活を余儀なくされている人々をはじめ、仮設住宅に住んでいる人々が7万人、仮設住宅の抽選にもれ、高い民間賃貸住宅に住んでいる人や、県外にやむなく避難した人が10万人いるともいわれている現状がありますが、この17万人以上の人たちに、そういった「(幸せに暮らすことのできる)居住の権利」が確保できているとは思えません。

「すべての人が持つ基本的人権である」居住の権利

とは言っても、現実的には(私もそうでしたが)私たちはあまりにも当然のように「住まい」を確保しているものですから、「居住の権利」といってもピンとこないのではないかと思います(被災者のように、全く予期しなかった今回の災害で、一瞬のうちに「住まい」をなくした人々にとっては、自分たちの「居住の権利」は切実に考えられるものでしょうが)。

前にも述べたように「居住の権利」は、「基本的人権(誰でも同じ人間として生きることを認められている権利のこと)」なのです。私たちが生きる上で必要なのは、「住まう権利」であり、そしてすべての人が「住まう権利」を持っているということを、まず理解しなければならないのです。そこにどんな理由があったとしてもです。例をあげると、ホームレスの人たちに対して「働かないのだから家がないのは当然」という見方が多数を占めていると思います。しかし、だからといって「住まう」という基本的人権までもが無視されているのはおかしいと思わなければならないのではないのでしょうか。すべての人々が「おかしい!」と思うことが「居住の権利」という「基本的人権」を語る第一歩になると思います。

「みんな同じや!」という見方にならなければ解決しない。

「男女平等」というものに例えて言うと、最近、世間で「男女平等」に対して異論を唱える人はほとんどいなくなっていると思います。これはつまり、「男や女であることから差別を受けてはならない」ということがすべての人に理解されてきた結果なのだと思います。これらと「居住の権利」というのは全く同じではないのでしょうか？

「居住の権利」、「基本的人権」などと言うと、「私には難しくてようわからへんわ」と思われるかも知れません。けれどこれらの問題全ては、「人間みんな同じや!!」というもっとも簡単な視点で解決できるのです。

「むづかしいことあらへん、みんなおんなじや!」

姫路心のケアネットワークの岸岡さんからの寄稿です。震災後ずっと緊張し続けてきた被災者、震災後動き続けてきたボランティア。「我慢も限界」という岸岡さんの言葉ですが、確かに2年近くたった今、誰もが疲れてきているのは事実です。連絡会でも深刻に受けとめ、今月の第4週の持ち回り制の会議進行と司会を岸岡さんをお願いすることになりました。



☆☆☆☆☆遠隔地（姫路）被災者SOS・我慢も限界☆☆☆☆☆

最西遠隔地（姫路）で現在も480人が不自由な生活を余儀なくされています。昨年の4月から入居がはじまり、ピーク時には660人が入居されました。昨年末から退去が進み、自宅の再建、通勤・子どもの教育などの事情で民間住宅で生活再建される方も増えつつありますが、350世帯の大多数は恒久住宅を望んでおられます。しかも3月末の意向調査では89%の住民が元いた地域に一日も早く帰りたいと訴えておられます。8月の恒久住宅一元化募集にあたりボランティアに説明を求められ、5ヶ所で説明会を実施し、住民の関心度の高さを肌で感じ取りました。しかし、募集住宅は希望地域でないと応募を辞退された方も多数おられます。期待度が高かっただけに生活再建の遅れで心身ともに限界に達しています。

そこで姫路市内4ヶ所の仮設住宅と雇用促進住宅に入居されている住民にGHQ（精神健康調査）を実施し、併せて被災地で活動するボランティアにも調査をしました。下記に示す数字が「我慢も限界だ」と訴えています。誠にとおこがましい言い方かもしれませんが、ボランティアも被災者共々被害者になりつつあります。

みなさんに緊急発進します。被災者もボランティアも心身共に限界です。今一度みなさんのご支援を切にお願いします。

調査日96年8月28日～9月1日 調査項目28項目

地区（仮設）	調査人数	平均年齢	平均値	症候群
南駅前仮設	10	68.1	15.8	90%
御国野仮設	21	59.1	13.6	71%
新白浜仮設	53	57.9	10.3	60%
玉手仮設	106	51.8	11.9	67%
合計	190	54.4	12.9	67%

	調査人数	平均年齢	平均値	症候群
ボランティアA	32	36.0	9.1	52%
雇用促進住宅	15	56.1	12.5	75%
一般ボランティアB	21	49.8	3.3	14%

（注）ボランティアAは「仮設」支援NGO連絡会参加団体
ボランティアBは震災に関係しないボランティア

調査結果から通常の市民生活を送っている方でストレス群は14%くらいですから、被災者のストレス度の高さ（5倍）に驚きです。また、特筆すべきことは、取り残された存在のいっばん住宅被災者です。情報不足、見捨てられた状態でイライラも限界に達しています。聞き取り調査でも見捨てられた現実を訴えられています。そしてまた驚くべきことは、被災地で活動するボランティアの高さ（4倍）です。共倒れ寸前です。

姫路こころのケアネットワーク

代表 岸岡 孝昭

姫路市青山南3丁目12-15

TEL/FAX (0792) 66-3529

私も、震災後休まず活動して疲れしました。点数も14点です。

（文責 岸岡）